

月の神話的表象

—消された月を巡る一考察—

狩 野 萌

はじめに

『万葉集』には太陽よりも月を詠った歌が圧倒的に多く残されているにも関わらず、『古事記』や『日本書紀』における月の記述は極めて少ない。そのため日本神話の月の存在感は薄く性別については男である、というのが従来の見解であった。ところがネリー・ナウマンの学際的な研究によると縄文時代の土偶や土器には月を象徴化した「死と再生」の思想が刻まれているという。つまり縄文時代には月は思想上重要な位置を占めていたのである。また土偶は女性を象っているものが多いことから、月は女性的だったといえよう。縄文時代だけでなく旧石器時代のユーラシア大陸においても月は観測されており、月と女性を結びつける意識があった。そのため人類は女性的な月を太陽よりも先に崇拜していた可能性が指摘されている。

ではなぜ『古事記』『日本書紀』において月は男性的で影の薄いものに変化したのか。本論では月の神話的表象の変容を考

察することで、縄文時代から古代にかけて起こった思想上の変化を明らかにしたい。

一 先史時代の月の表象

人類が芸術活動を始めた旧石器時代から月は観測されていた。その証拠となるのがフランス・ドルドーニュ地方のブランシャール壕から発見された骨片である。これには月の満ち欠けが記録されていることがマーシャックによって明らかにされている。^{注1} またフランス・ボルドー地方で発見された妊婦を連想させる「ローセルの女神」(図1)は三日月状の角を持っているが、これには陰暦の一年間の月数と同じ十三本の線が刻まれている。ここから月と女性の親和性を旧石器人が認識していたことが読み取れる。

月が欠けていくことは月の死と考えられ、新月は復活と考えられた。月の盈虚は死んでも再び甦ることを連想させ死と再生の象徴となったのである。月は潮の満ち引きに関与することか

図1



た。そのため人類は太陽よりも先に月を崇拜していたのではないかと提起されている。^{注4}

旧石器時代から月が描かれたことはすでに述べた。では縄文時代の遺物には月は表現されているのか。それを明らかにしたのがドイツの民族学者ネリー・ナウマンである。ナウマンは図像学、神話学、宗教学、民族学、民俗学の観点から縄文時代の精神文化を考察した。ナウマンによれば土偶や土器には月を基にした「死と再生」が象徴化されているという。

ナウマンの論を具体的にみていきたい。ナウマンは「縄文時代の若干の宗教的観念について」で長野県で出土した藤内土偶（図2）を出発点として論じている。この論文においてナウマンはまず、土偶は生産力の象徴であるという一般的な見解を単純だと批判し遺物の「個々のあらわれ」から考察しようと試みている。

考察対象にしている藤内土偶には、涙を思わせる目の下の線や、浅い鉢状の顔、頭頂部の蛇などの特徴がある。この解釈にあたりナウマンは中国の土器をアメリカ、イランなどの遺物と比較したカール・ヘンツェの研究を援用している。

ヘンツェがとりあげたのは中国・半山で出土した人面付の土器（図3・4）である。ヘンツェはこの土器の目や口の下の線は涙や唾液であり神の性質を表すと解釈した。藤内土偶は頭部にヘビが這っているが人面付き土器の角状の突起の間からも蛇が顔を出している。これに関してヘンツェはイランの羊の像（図5・6）とメソポタミアの蛇の図像（図7）を取り上げ、

ら水を支配すると考えられた。水に満ちた生物も月の影響を受けるとされ、月齢にそって農業、牧畜、漁業、林業が行われた。^{注2} また月の盈虚の周期（約二十九日）と女性の生理周期（約二十八日）はほぼ一致しており、月は月経や妊娠、ひいては豊饒をもたらずと考えられた。さらに脱皮して甦るヘビや水辺に棲むカエル、繁殖力の強いウサギなどの生物を月と結び付けることは世界中にみられる。これらのことからエリアードは「月Ⅱ雨Ⅱ豊饒Ⅱ女性Ⅱ蛇Ⅱ死Ⅱ周期的再生」^{注3} という型を見出している。

月は夜の闇を照らす光源であり、照明器具の発達していない時代には現代と比べ物にならないほど生活に根付いていた。それだけでなく太陽よりもはるかに詩情を掻き立てる存在であつ



图
3



图
2



图
4



图
6



图
5

図7

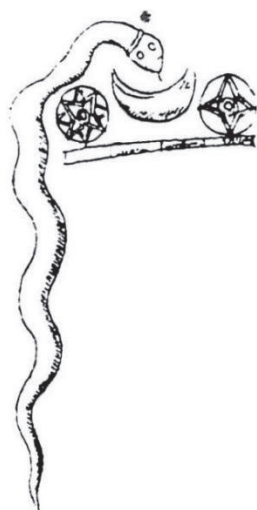


図8



図9

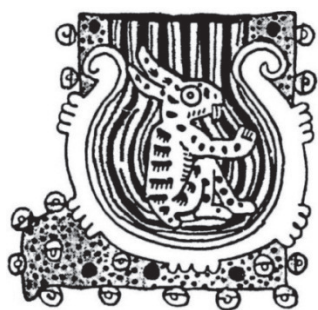


図10



三日月状の角から「生の水」を飲み再生する蛇というモチーフを指摘した。死から甦った三日月に満ちた水は生命を再生するものと考えられた。ここからヘンツェは人面付き土器の涙は月神の生命の水でそれをヘビが飲み再生すると解釈した。^{注5}

藤内土偶には角は無いがナウマンは、三日月は水をためる容器と捉えられることがありと主張した。月が容器と同一視されていた例として、シユメール(図8)やアステカの図像(図9)を挙げている。藤内土偶では浅い鉢状の顔が水をためる容器の役割を果たすとナウマンは解釈した。また蛇が水を飲む例としては藤内土偶と同時期の、蛇が容器にまわりつく土器(図10)がある。

月が若返りの水を持つことは、『万葉集』の次の歌にもみられる。

天橋も 長くもがも 高山も
高くもがも 月読の 持てる

をち水 い取り来て 君に奉りて をち得てしかも

(卷十三・三三四五)^{注6}

こういった月が水を持つモチーフは沖繩のアカリヤザガマ伝承にもある。概要は以下の通りである。月と太陽が人々に長命の薬を与えようとして節祭の新夜にアカリヤザガマを派遣した。人間に変若水を、蛇に死水を浴びせるよう命じられたアカリヤザガマは桶を担ぎ一つには変若水と一つには死水を入れ、下界へ降った。ところが蛇が現われ変若水を浴びてしまったためアカリヤザガマはしかたなく死水を人間に浴びせた。その罰としてアカリヤザガマは月で永遠に桶を担ぐことになった。^{注7}

石田英一郎によるとアカリヤザガマ伝説は「月の水汲み人」伝承(月の斑点を、罰を受け水汲みをし続ける人間とみなす伝承)と月が生死を司る伝承の両方が含まれる原初的な形態であるという。^{注8}この月の水汲み人伝承はナウマンに基づけば縄文時代にまで遡る可能性があるといえよう。

このようなことからナウマンは藤内土偶について、月が持つ「生の水」が鉢状の顔に流れ込み、蛇がそれを飲んで再生していると解釈し、この土偶には「月の神格の象徴的な表現」があると主張した。そして縄文時代の宗教の中心は「生産性」ではなく、「死と再誕生」であり、月や蛇がこの「最も重要な基本思想」を表していると明らかにした。^{注9}ナウマンは遺作『生の緒』において以下のように結論づけている。

すべての宗教が第一に死を克服する試みであるという原理

にまったく一致していた。死は終焉ではなく、再誕生ないし新たな生への甦りや覚醒を通じて、別の生への入口だと見なされた。そのための雛形や保証が存在したはずで、世界各地の多くの民族と同じように、自分自身の死と甦りのドラマを毎月演じる月という天体にそれが見つかったのである。^{注10}

縄文時代の月に焦点を当てた研究はナウマン以前には存在しなかった。縄文人が太陽の運行を計算して構造物を造ったことは考古学の分野でも明らかにされている。^{注11}だが月についてはその考察の範囲外であった。^{注12}考古学が月の重要性を認識していない以上月を考慮に入れることは難しいからである。

ナウマンの功績のひとつは、縄文時代の宗教・精神文化は孤立した特異なものではなく普遍的な要素があると示したことである。一部の研究者には縄文時代を特異で孤高なものにするこゝとで縄文を基層とする日本そのものを賛美するような意図が少なからずある。だが実際はそのような孤立したものではなく大陸と繋がる開かれた縄文のイメージを画像から読み取ることができるのだ。

二つ目は縄文時代の画像と古代の文献をつないだことである。先史時代は考古学が、古代は歴史学や国文学が、と枠にとられずに通史的に論じたことで古代の神話に新たな解釈が付与された。

ナウマンの縄文文化研究は日本の研究者が持っていない視点で行われ参考になるべき点が多々あるが、考古学において顧み

られることはほとんどなく黙殺されたに等しい。このことは考古学者の多くが宗教学や文化人類学、民俗学などに精通していないことに起因している。

考古学は証拠の示しにくい精神面は深く論じない傾向にある。現在はそれが一般的だがかつては遺物から思想を読みとることは学問領域が未分化の時代には盛んに行われていた。例えば人類学者の鳥居龍蔵が土偶をユーラシア大陸の「地母神像」と並ぶものとみなしてから考古学ではそれが解釈の一つとして定着した。だが学問領域が細分化してゆくと考古学では編年研究（遺物を時代別・地域別に整理すること）によって精神文化の究明を目指すことが主流となった。やがて物質面の研究は体系化されたが、遺物の型式の時代的地域的差異の理由を明らかにできない以上編年から精神文化を読み取ることが不可能に近く、その試みは事実上頓挫した。考古学には依然として精神面を論ずる方法論はなく「豊穰」「呪術」「祈り」といった言葉で片付けることが多々ある。

一方でナウマンの研究は方法論をもつて論じており、想像に基づくような突飛なものではない。欧米においては図像を読み解き先史時代の精神文化を追究する研究の蓄積がある。前述したマーシャックやヘンツェのほかにもマリヤ・ギンブタスが著書『古ヨーロッパの神々』において図像学的な研究を行い方法論を確立している。

ここで土偶は女性を象っているものが多いことから、縄文時代には月は女性的であったのではないかと推察される。ナウ

マン自身は女性像であることを重視していないが土偶が女性的な特徴を持つていることは明らかである。旧石器時代のローセルの女神にも月と女性の結びつきがみられるように、土偶にもそれが表れているのではないかと。

同じく縄文文化を論じた吉田敦彦も「土偶によって表された、縄文宗教の女神は、地母神であると同時に、月の女神でもあると信じられていたのだ」と述べている。吉田は比較神話学の観点から土偶を考察し、土偶はハイヌウエレ型神話の殺される女神であると論じた。ハイヌウエレ型神話とはイエンゼンが提唱したもので、イモや果樹を栽培する「古栽培民」の食物起源神話の話型で身体もしくは死体から栽培植物が発生すると語る。^{注14}インドネシア、セラム島ヴェマーレ族の神話に登場する少女の名からその名がつけられた。神話の概要は以下の通りである。ココヤシから生まれた少女ハイヌウエレは便として高価なものを生み出す。だが人々に妬まれたハイヌウエレは祭りの晩に生き埋めにされる。ハイヌウエレの養父がその死体を掘り出し、バラバラに切断し広場のあちこちに埋めたところ死体は芋に変化した。^{注15}

吉田は、土偶がほとんど壊されて離れたところから出土することとハイヌウエレがバラバラにされることが類似すると指摘し縄文時代にハイヌウエレ型神話を基にした祭祀が行われていたと論じた。^{注15}

このハイヌウエレ型神話は「死・殺害・月・豊饒」が密接に関係する世界観で、「死と殺害が生の一部」という思想が顕著

である。毎月死に、また甦る月は生のために死が必要であることを暗示しており、この点でハイヌウエレ型神話は月の死と再生と親和性がある。イエンゼンが想定したハイヌウエレ型神話の原型は月が殺害されるものであり、^{注16}前述のハイヌウエレ神話の異伝では殺された少女が月に変化する。

吉田は土偶が月の女神である可能性について積極的には論じていない。土偶を殺された女神とみなす説は縄文と古代の間の空白があるなど仮説的な面もあるが、これを支持するとしてもやはり縄文時代の月は女性的にとらえられていたといえよう。このように縄文時代に崇められた月の女神が古代に表れなくなるのはなぜか。

二 古代人と月

縄文時代の月は女性的にとらえられていたが古代では男とされている。『古事記』や『日本書紀』に明確には描かれていないものの、『万葉集』に「月読壮子」「月人壮子」と詠われていること、『日本書紀』においてウケモチノカミを殺害したこと、『皇太神宮儀式帳』に「男形」とあることが男とみなす理由となっている。月が女神とみなされるのは一例のみで『出雲国風土記』意宇郡の賣豆貴神が『三代実録』に「女月神」として記載されている。

太陽が女神、月が男神であることに關して西郷信綱は「大陸の陰陽觀が伝来する前と後では、日月の性がちがっていたことになる」^{注19}と述べているが、記紀編纂期にはすでに陰陽觀が伝来

しており『古事記』や『日本書紀』に中国の影響があることは明らかである。特に『日本書紀』は中国を意識して書かれた書物であり、このことから何らかの意図がみえるといっても過言ではない。

また縄文時代の月は思想上重要な位置を占めていたが日本神話の月は影が薄い。『古事記』において月は誕生して統治領域を命じられる場面のみである。『日本書紀』ではそれに加えてウケモチノカミ殺害と顕宗紀において人に憑依する場面のみで、ほとんど活動していない。このことからアマテラスやスサノヲに比べ存在感の薄いものとしてとらえられることが多く、倉野憲司に至っては「太陽との関係から引き合ひに出されたまでであつて、何等政治的乃至宗教的意義を有するものではない」^{注20}と述べている。これと対照的に河合隼雄は重視されていたからこそ影が薄いと真逆の意見を述べている。河合は、日本神話は「何かを中心におくかのように見えながら、その次にそれと対立するものによってバランスを回復し、中心の空性を守る」^{注21}という「中空構造」になっていると論じた。ツクヨミやアメノミナカサシなど三柱で登場する神の中心に位置する神の存在感が薄いのは神聖ゆえであるという、従来の見解を転換した興味深い指摘である。

河合を除き古代の月は影が薄く男性であるというのが通説であったが、前述した縄文時代の月を念頭に入れると古代の月の存在が当たり前であったとは断言できない。『古事記』と『日本書紀』では、かつて死と再生の象徴として崇拜されていた月

が太陽の影に隠されている、もしくは消されているといえよう。

古代人は月に對して無關心だったわけではない。『万葉集』では月の歌が太陽の歌よりも詠まれその美しさが賛美された。月が恋人を偲ぶよすがとなっており、恋の歌に詠みこまれた。逢引きは月夜に限られたという説まである。月夜は神聖な時間ととらえられたのだ。また『日本書紀』一書第六ではツクヨミが「滄海之原の潮の八百重」を治めるよう命じられているように月が潮汐に影響を与えることは古代人も認識していた。前述した『万葉集』卷十三、三二四五番歌にも月と水の関わりと、月の死と再生のシンボリズムが表れている。他にも『古事記』のヤマトタケルとミヤヅヒメの間答歌からは月と月経が結びつけられていることが読み取れ、『日本書紀』一書第十一のウケモノノカミ殺しには月と農耕の関わりが示されている。

このように『古事記』や『日本書紀』『万葉集』からは死と再生、水、海、農耕、月経といった世界的に広がる月のシンボリズムの断片を見ることが出来る。そのため月が生活に根付いていながら神話に残されていないことは奇妙でありなんらかの意図が働いたと思わざるを得ない。なお『万葉集』で恋の歌に月が詠みこまれたのと対照的に『古事記』『日本書紀』の恋の歌には月はほとんど詠まれない。他にも『古事記』を始めとする文献類や『万葉集』には月とヘビやカエル、ウサギといった生物との結びつきは表れておらず、この点でヘビやカエルが多く造形された縄文時代との断絶がみられる。

縄文からの変化を垣間見ることが出来るものとしてツクヨミが唯一活動する『日本書紀』一書第十一を挙げたい。

一書に曰はく、伊弉諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、高天之原を御すべし。月夜見尊は、日に配べて天の事を知すべし。素戔鳴尊は、滄海之原を御すべし」とのたまふ。即にして天照大神、天上に在しまして曰はく、「葦原中國に保食神有りと聞く。爾、月夜見尊、就きて候よ」とのたまふ。月夜見尊、勅を受けて降ります。已に保食神の許に到りたまふ。保食神、乃ち首を廻して國に嚮ひしかば、口より飯出づ。又海に嚮ひしかば、鰭の廣・鰭の狭、亦口より出づ。又山に嚮ひしかば、毛の麁・毛の柔、亦口より出づ。夫の品の物悉に備へて、百机に貯へて饗たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿然り作色して曰はく、「穢しきかな、鄙しきかな、寧ぞ口より吐ける物を以て、敢へて我に養ふべけむ」とのたまひて、廻ち劔を抜きて撃ち殺しつ。然して後に、復命して、具に其の事を言したまふ。時に天照大神、怒りますこと甚しくして曰はく、「汝は是惡しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔て離れて住みたまふ。是の後に、天照大神、復天熊人を遣して往きて看しめたまふ。是の時に、保食神、實に已に死れり。唯し其の神の頂に、牛馬化爲る有り。顚の上に粟生れり。眉の上に蠶生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稻生れり。陰に麥及び大小豆生れり。天熊人、悉に取り持ち去きて奉進る。時に、天照大神喜びて曰

はく、「是の物は、顯見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち粟稗麥豆を以ては、陸田種子とす。稻を以ては水田種子とす。又因りて天邑君を定む。即ち其の稻種を以て、始めて天狹田及び長田に殖う。其の秋の垂穎、八握に莫莫然ひて、甚だ快し。又口の裏に蜜を含みて、便ち絲抽くこと得たり。此より始めて養蠶の道有り。^{注五}

これには類話が二つあり、『古事記』ではスサノヲがオホゲツヒメを殺害しその死体から穀物と蚕が発生する。『日本書紀』第五段一書第二ではカグツチとハニヤマビメの間に生まれたワクムスビから五穀と蚕、桑が発生している。これらはハイヌウエレ型神話との関連が吉田敦彦や大林太良によって指摘されている。^{注六}ハイヌウエレ型神話は前述したように「死・殺害・月・豊饒」が密接に関わる世界観で、栽培植物の起源を語るだけでなく死や殺害、生殖といった根源的な事柄に迫るものである。月がハイヌウエレ型神話に密接に関わるのも死と生が隣り合わせであることを暗示するからである。そのため他の類話と比べるとウケモチノカミ神話にのみ月が関わっていることが注目値する。これをふまえると元来月が重要な位置を占めていた神話が月の追放を語るものへ変化しているといえよう。

『日本書紀』一書第十一において月は「悪しき神」として追放され、ウケモチノカミから発生したものはアマテラスやニギが広めていく。この点オホゲツヒメ神話、ワクムスビ神話の二者と比べるとウケモチノカミ神話はヤマトの王権神話の性格

が強い。本来月が重要な役割を担っていた神話が月の追放へと変化しているのは、太陽神が穀物等を広める「正義」の側に配されているからであろう。神話において王権と稲と太陽は不可分で、この三位一体が神話の基盤となっている。月が「悪しき神」であることや影が薄いことは太陽の存在を強調しているからであろう。

『日本書紀』では「悪しき神」として貶められている一方で『万葉集』には月が永遠の象徴として太陽と共に詠まれる歌もある。ここには日月が安定することで国家が安泰するという思想がみえ、なかには日を天皇に月を皇子に見立てる歌もある。月を皇子とみなすことは一見月を尊重しているようにみえるが、反転すれば月は太陽より劣るものとして考えられているともいえよう。例えば『万葉集』の次の歌は月を尊重する意志が薄れていることがわかる。

ひさかたの 天行く月を 網に刺し 我が大君は 蓋に
せり (卷二・二四〇)

月を天皇の蓋に見立てることは太陽の絶対的な優位を示しているといえよう。月はいくまで二番手であり王権からすれば太陽を上回することは許されないのだ。

次節では月の変容の理由を明らかにしたい。

三 月から太陽へ

月の存在感の薄さは太陽を崇める神話の構造による。太陽は強さの象徴であり王権と結びつくことはエリアードも指摘して

いる。^{注27} 太陽、すなわち王権の権威を高めるため脅威となる月はその存在が消されていったのだ。

この王権と結びついた太陽神、アマテラスはもとも男性神であったという研究がなされている。例えば岡田精司は日の神を祀る巫女であり日の妻であるヒルメがアマテラスの前身だと述べ、太陽を祀る者が神格化され太陽神そのものとなりアマテラスへと変化したと論じた。^{注28} 岡田はまた太陽神の子とその母が海からやってくる日光感精型の始祖伝承が天皇家に存在した可能性を指摘する。日光感精説話は太陽によって妊娠し生まれた子が王や偉大な人物となる話型で三品彰英によって論じられている。^{注29} 太陽光線が妊娠をもたらし日光感精説話は古代において太陽が男性的にみなされていた可能性を示しているといえよう。このモチーフは縄文時代にもみられる。長野県、藤内遺跡の三十二号住居址は女性器を模した形をしているが、冬至の太陽の光が射し込むように設計されていた。^{注30} このように縄文時代には太陽は男性的にとらえられていた可能性がある。

岡田だけでなく筑紫中真も太陽神は男性であったが、太陽の妻であったヒルメが神格化され太陽神そのものになったと述べている。筑紫は『古事記』や『日本書紀』の編纂者には持統天皇をモデルにアマテラスの権威を高め至高神にする意識があったと論じている。^{注31} 他にも溝口睦子は弥生時代の太陽神は南方的な女神アマテラスであったが古墳時代後期に北方的な性格を持つタカミムスヒになり天武期に再びアマテラスが据えられたと述べている。^{注32}

アマテラス以外にも男性太陽神が存在した片鱗が『古事記』や『日本書紀』には見受けられる。例えばヒルコは「昼子」と訓ずることもでき、舟に乗せられて流されるところが太陽船の神話型と類似している。^{注33} 他にもサルタヒコは太陽と親和性のある猿を名に持ち、『日本書紀』第九段一書第一において輝いていたと記述されているように太陽神的性格がある。このように太陽が女神であることが絶対ではないならば月が男神であることにも疑いを向けてよいだろう。

ところで太陽を王権の象徴にするならば、強い男性神のほうが都合がよいと思える。ここで性別に対する意識を考えたい。国家が男性優位に変化していくなかで女性が太陽神・皇祖神であることは矛盾であろうか。太陽神が女神にされたことに關して筑紫は当時の女性の地位の高さが反映されていると述べているが単純には肯定できない。

松村一男によるとアマテラスのような処女にして母という女神は男性の幻想が映されているという。^{注34} アマテラスは女から生まれず、子供はウケヒという形で生まれていることから生殖行為から遠い女性であり男性にとつて都合のよい存在である。ここに神話が男性の視点で叙述されていることがうかがえる。男性が優位になる父系化が芽生えているともいえよう。

七世紀まで日本列島には完全な父系制は成立しておらず双系の社会であったことは諸学が明らかにしている。^{注35} なかでも田中良之の齒冠測定によると男女ペアで埋葬されていた骨は夫婦ではなくキョウダイであったという。^{注36} ここから血の繋がりを重

視する双系的な家族制度をみることができる。田中によると縄文時代は双系社会であり、弥生時代以降墳丘墓において男性優位が徐々に表れるようになる。古墳時代前期には女性首長の墓も存在したが古墳時代後期以降姿を消し、父系化が支配者層で徐々に進んでいったという。古代の日本は後代に比べ女性の地位が高く双系的だったとはいえ男性優位の傾向にあった。女帝も存在したが夫と死別した女性や独身の女性に実質的に限られていた。

この父系化の流れのなかで女性は政治の場から排除され神秘化されるようになったのである。女性に神秘性をみることは人類の黎明期からあったわけではない。義江明子によれば先史時代には女性の働きが男性同様重視され、宗教行為も女性に限定されず男女とも行っていた。このような時代には神秘は男女の和合にあり女性の「産む力」にあったわけではない。だが「男性支配の成立、現実の女性の地位の低下とともに、それとはうらはらの形で女性祭祀の特殊化」^{注37}が始まるという。女神が皇祖神に担ぎ上げられたからといって女性が尊重されていたわけではないのだ。

さらに男性優位社会が成立していくとともに女性性、つまり月経、妊娠、出産といった男性が持っていない「女らしさ」が忌まれるようになる。アマテラスも女性性が弱められた存在といえよう。月経を例に挙げると『古事記』のヤマトタケルとミヤヅヒメの問答歌にみられるように古代ではさほど月経の忌みが厳しくはなかった。これに関して折口信夫は月と月経、槻を

関連付けており、月経は神の訪れたしるしとしてかつては神聖視された可能性を指摘している^{注38}。だが時代が下るとやがて「赤不浄」として忌まれるようになる。これは推測の域を出ないが月経は月と結びついていることから、月経の排除は月の排除と遠からず繋がっているのではないか。

参考までに、ヤマト政権と同じく太陽を王権の象徴とした琉球王朝では月も共に崇拜されていた。首里城には「御日御月ノ御前」という神霊があり国王は毎朝東方に向かって香を焚き拝礼した^{注39}。また琉球王朝では尚巴志王統の守護神として靈石「月しろ」が祀られていた。他にも「船多のおもろ御さうし」という歌謡のなかに王が月を拝したことが見受けられる^{注41}。

琉球ではノロたちは月経でも神事を行っていた。一方ヤマトでは対照的に月経は時代が下っていくと忌まれるようになる。開得大君は宗教上大きな権威を持っていたが、ヤマトにおいては斎宮の宗教的権威は形骸化していた。ヤマトと琉球の違いはこのような女性性の排除の有無にあるのではないか。

神話を編纂するヤマト王権は処女にして母という男性優位社会にとって理想的な女性を太陽神に据え王権のシンボルとし、男性からみて神秘性をもたない男性を月にすることで月の存在を貶めたのだ。

おわりに

縄文時代、月は女性的で精神文化において重要な位置を占めていた。ところが古代になると月は男性的で影が薄いものとな

った。この変化の理由は、太陽を強調する神話構造と女性の地位の低下にある。王権の強さを象徴するには太陽は最も適していた。太陽の権威を高めるため月はその存在が消されていたのだ。

太陽が女性、月が男性とされたことは、単純に女性の地位が高かったことを示しているのではない。女性が政治や実務から徐々に排除されていた一方で太陽神＝皇祖神が母と処女という両立しない属性を持つことからみられるのは、男性優位社会の矛盾に満ちたエゴである。太陽神を男性からみて神秘的な女性、月を男性からみて神秘性を持たない男とすることで、月を神話から消す意図があったのではないか。

従来の研究では月は見過ごされがちであった。特に縄文時代についてはナウマン以前には研究がほとんどされていなかった。だが月は旧石器時代より人類の生活にも精神にも根付いたものであった。忘れられた月に目を向けることで新たな発見が得られるのではないか。

図の出典

- 図1 角を持つヴィーナス（ローセルのヴィーナス）、フランス、ドルドーニュ地方、陳岡めぐみ、TBSテレビ編『ボルドー展 美と陶酔の都へ』TBSテレビ編、二〇一五年、四五頁
- 図2 土偶 長野県、藤内遺跡出土 ネリー・ナウマン著、檜枝陽一郎訳『生の緒』言叢社、二〇〇五年、一五二頁
- 図3 仰韶文化半山類型彩陶 中国、甘肅省 Hentze,C.Gods and Drinking Serpents History of Religions.4 (2) :179-208,fig.1
- 図4 仰韶文化半山類型彩陶 中国、甘肅 Hentze,op.cit.,fig.4
- 図5 牡羊の彩色土偶 イラン、テベ・ギャン Hentze,op.cit.,fig.19
- 図6 牡羊の彩色土偶 イラン、テベ・ギャン Hentze,op.cit.,fig.18
- 図7 境界石 シュメール Hentze,op.cit.,fig.21
- 図8 小祭壇 イラン、スーサ ナウマン、前掲書、一六一頁
- 図9 月の象形文字、(ボルジア写本) アステカ ナウマン、前掲書、一六一頁
- 図10 みづち文鉢、下原遺跡、富士見町井戸尻考古館編『井戸尻 第八集』富士見町井戸尻考古館、二〇〇六年、四四頁

注

- 1 Marshack, A., The roots of civilization: the cognitive beginnings of man's first art, symbol and notation, McGraw-Hill, 1972
骨片には円や半月状の六十九個の模様が曲がりくねったへびのように刻まれている。マーシャックによると右側に月が見えない期間が、左側に満月の期間が、中央部に半月の期間が描かれ、二か月分の月が記録されているという。
- 2 ハイロ・レストレポ・リベラ著、近藤恵美訳『月と農業 中南米農民の有機農法と暮らしの技術』農村漁村文化協会、二〇〇八年によると月が満ちるときに増やすこと（種蒔き、植えつけ等）を、月が欠けるときに減らすこと（収穫、材木の伐採、去勢等）を行うように指示している。こういった伝承は世界各地にみられアメリカでは『農事暦』にまとめられている。日本でも「エンドウ豆は闇夜に蒔くと良い」「月夜に伐った竹は虫がつく」といった俗信がある（『尚学図書編』故事俗信ことわざ大辞典』小学館、一九八二年）
- 3 ミルチャ・エリアーデ著、久米博訳『豊穣と再生 宗教学概論 2』（エリアーデ著作集第二巻）せりか書房、一九七四年、二九頁
- 4 Briffault, R. S., The Mothers: A Study of the Origins of Sentiment and Institutions, Macmillan, 1927.
- 5 Hentze, C., Gods and Drinking Serpents History of Religions, 4 (2) : 179-208
- 6 小島憲之ほか校注『万葉集』（新編日本古典文学全集八）小学館、一九九五年
以後歌の引用は同書に依る。
- 7 ネフスキー著、岡正雄編『月と不死』（東洋文庫一八五）平凡社、一九七一年、十一―十三頁
- 8 石田英一郎「月と不死 沖縄研究の世界的連関性に寄せて」『新訂版 桃太郎の母』（講談社学術文庫一八三八）講談社、二〇〇七年
- 9 ネリー・ナウマン著、渡辺健訳「縄文時代の若干の宗教的観念について」『民族学研究』第三九巻第四号、二七七―二九七頁、日本民族学会、一九七五年、二九三頁
- 10 ネリー・ナウマン著、檜枝陽一郎訳『生の緒 縄文時代の物質・精神文化』言叢社、二〇〇五年、二七八頁
例えば秋田県の大湯環状列石では、太陽の運行を基に石が並べられている。各々の列石の中心と日時計状組石は一直線上に並び、その方向は、太陽が最も北側に沈む「夏至の日没」の位置を指している。また三内丸山遺跡の六基の柱で構成される遺構では遺構の長軸の延長に立つと柱の間から夏至と冬至の日がみえるという。（小林達雄監修『縄文の力』（別冊太陽 日本のおんな）二二）
- 11

平凡社、二〇一三年)

- 12 ヨーロッパのストーンヘンジでは太陽だけでなく月や星の運行が計算されていたことが明らかにされているが(G・S・ホーキンズ著、竹内均訳『ストーンヘンジの謎は解かれた』(新潮選書) 新潮社、一九八三年) 日本の環状列石に月の運行が表れているのかについては研究されていない。

- 13 吉田敦彦『縄文宗教の謎』(古代学ミニエンスイクロポディア十六) 大和書房、一九九三年

- 14 イエンゼン著、大林太良ほか訳『人類学ゼミナール二

- 15 殺された女神』弘文堂、一九七七年、一九二頁

- 吉田敦彦『縄文土偶の神話学 殺害と再生のアーケオロジ』名著刊行会、一九八六年

- 16 太陽男トウワレはラビエを妻に望んだ。だが彼女の氏族はそれを拒否したためトウワレはラビエを地中に沈めようとした。ラビエは沈められる途中母親に、豚を殺して祭りを行うように言った。そして自分は三日後には月になると言った。その後親族は豚を殺して三日間祭りをを行い、天に月が初めて昇ったのを見た。(イエンゼン、前掲書、一九七七年、五九〜六〇頁)

- 17 縄文土偶が殺された女神であるならば、弥生時代に一旦土偶が消滅し古代においてオホゲツヒメ・ウケモチノカミ神話として突如復活することになり、空白期間がなぜ存在するののかの説明がなされていないなど論に不十分な

点がある。

- 18 男とみなしているのは本居宣長(大野晋、大久保正編集校訂『本居宣長全集 第九卷』筑摩書房、一九六八年) 松村武雄(『日本神話の研究 第二卷』培風館、一九五四年) 倉野憲司(『古事記』(日本古典文学大系一) 岩波書店、一九五八年、『古事記全註釈 第二卷上』三省堂、一九七四年) 西郷信綱(『古事記注釈 第一卷』平凡社、一九七五年) などが挙げられる。

- 19 西郷信綱『古事記注釈 第一卷』平凡社、一九七五年、二二七頁

- 20 倉野憲司『古事記全註釈 第二卷上巻(上)』三省堂、一九七四年、三三〇頁

- 21 河合隼雄『中空構造日本の深層』(中公叢書) 中央公論社、一九八二年、三七頁

- 22 古橋信孝『古代の恋愛生活 万葉集の恋歌を読む』吉川弘文館、二〇一六年

- 23 『古事記』のヤマトタケルとミヤヅヒメの間答歌に「月立ちにけり」「月立たなむよ」と詠われているのみである。

- 24 兎に関しては『文華秀麗集』に収められた桑原腹赤の七言詩「月夜言離一首」に「月兎」がみえるのみである。

- 25 坂本太郎ほか校注『日本書紀 上』(日本古典文学大系六七) 岩波書店、一九六七年

- 26 吉田、前掲書、一九八六年

27 大林太良『稲作の神話』弘文堂、一九七三年
ミルチャ・エリアーデ著、久米博訳『太陽と天空神 宗教概論1』（エリアーデ著作集 第一巻）せりか書房、一九七四年によると太陽崇拜が際立つようになるところはエジプトやメキシコなど古代文明の「発達」した地域であったという。

28 岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九八八年
三品が紹介した天道法師説話では内院村の照日の菜の娘が日の光によって妊娠し天道法師と呼ばれる男の子を産んだ。一説には天童の母は懐妊の身でうつぼ舟で流され、内院村の浜に漂着して川のほとりで天童を生んだという。同じく三品が紹介した大隅正八幡宮縁起もうつぼ舟と太陽が登場する。震旦国の王女大比留女は朝日が覆う夢を見て七歳で懐妊した。父王は生まれた御子と王女を空船に乗せて流れ着いたところを所領とせよと命じた。やがて日本の大隅につき御子は八幡と名付けられた。（三品彰英『増補 日鮮神話伝説の研究』平凡社、一九七二年）

30 富士見町井戸尻考古館編『井戸尻 第八集』富士見町井戸尻考古館、二〇〇六年、六五頁
筑紫申真『アマテラスの誕生』（講談社学術文庫一五四五）講談社、二〇〇二年

32 溝口睦子『アマテラスの誕生 古代王権の源流を探る』（岩波新書一一七二）岩波書店、二〇〇九年

33 太陽船とは太陽の運行を船になぞらえる神話思考である。エジプトなどにみられ日本では福岡県珍敷塚古墳の壁画に太陽船が描かれている。松本信広は太陽神を舟に入れ流すことで太陽の復活を願う儀式がヒルコ神話と関係しているのではないかと推察している。（松本信広『日本神話の研究』（東洋文庫一八〇）平凡社、一九七一年）

34 松村一男『女神の神話学 処女母神の誕生』（平凡社選書一九七）平凡社、一九九九年

35 明石一紀『日本古代の親族構造』吉川弘文館、一九九〇年
36 田中良之『骨が語る古代の家族 親族と社会』（歴史文化ライブラリー二五二）吉川弘文館、二〇〇八年、齒冠を測定するのは、歯が人骨のなかで最も保存状態の良いものであり、高い遺伝性があるからである。

37 義江明子『日本古代の祭祀と女性』吉川弘文館、一九九六年、二五七頁
38 折口信夫「小栗判官論の計画」「餓鬼阿弥蘇生譚」終篇」折口信夫全集刊行会『折口信夫全集3』中央公論社、一九九五年、折口は古代では次の歌のように槻の下に月小屋を造ったと述べている。

泊瀬の斎槻が下に我が隠せる妻あかねさし照れる月
夜に人見てむかも
（巻十一・二三三三）

槻は王権の象徴ととれることもあることから折口の説を

一概には肯定できない。しかし、槻と月の読み方は同じであり隠岐の別家（月経小屋）では槻の枝を戸口に立てたとの民俗事例もある。（柳田国男『禁忌習俗語彙』國學院大學方言研究會、一九三八年、一四頁）ここでは折口の発言も突飛なものではないかもしれないと指摘するに留めたい。

39

谷川健一編『日本の神々 神社と聖地 十三南西諸島』白水社、一九八七年、一三四頁、聞得大君御殿にも「御日御月御前」が祀られていた。（谷川、前掲書、一九八七年、一七一頁）

40

伊波普猷『をなり神の島1』（東洋文庫二二七）平凡社、一九七三年

41

外間守善、西郷信綱校注『おもしろさうし』（日本思想大系十八）岩波書店、一九七二年、二九七頁、なお現代語訳は注を参考に附した。

月しろの大主

月しろの大主は

きくやなき嶽から

（沖永良部島の）きくやなきの嶽から

山の端から下界を照らして

山端 治めかちへ

昇って照る月こそ

上がて 照る月しよ

我が父（王）の祈願に答えて出現して

吾が成さが せひき

祈願に答えて出現して昇るように

やひき ゑ 上がる様に

祈願に答えて出現して昇るように